

平成 27 年 5 月

語り部：杉野 富也

ちょうど 70 年前、今の松山空港がある辺りに、海軍の航空基地があった。そこで彩雲という航空機に乗っていた。私が話す体験談をこれからの参考にしてもらいたい。当時は小学校 6 年で義務教育が終わった。その後、今の中学校の代わりになる高等科が 2 年あり、20 銭から 30 銭の授業料を払っていた。1 銭であめ玉が 4 つ位買えている時代だった。私が中学生になった頃はシナ事変という戦争が始まった。毎日兵隊が中国の戦場に送られていくような時代だった。高等科 2 年が終わり、14 歳で軍需工場へ入社した軍需工場では製品の分析などを行った。工場で同期だった 3 人が土浦の海軍航空兵へ入隊した。当時、私が海軍航空隊を志望したのは、新聞で海軍の活躍が報じられていたからである。昭和 17 年 4 月に海軍航空隊から合格通知が届いた。

17 歳であった昭和 17 年 5 月に土浦の海軍航空兵へ入隊することになった。同期で入隊したのは約 1,450 人位だった。全国いろいろな所から来ていた。

海軍に入って、ボート漕ぎや水泳などで毎日鍛えられた。1 番苦労したのは「トン・ツー」の通信だった。ひらがな、数字、アルファベットなど約 90 ある符号を耳で聞いて、覚えなければならなかった。今でもモールス符号を覚えている。半年経つと、操縦と偵察に分かれたが、私は偵察になり、通信の勉強をしていた。毎日、ハンモックで寝る 5～10 分前に「トン・ツー」と言いながら覚えた。海軍時代はモールス符号で誤字脱字はなかった。私は通信が得意だったので、攻撃隊へ移らなかったと思う。高知の航空隊へ移った時に、19 歳で班長となった。

昭和 20 年 2 月に松山海軍航空隊基地に転勤した。当時、松山の基地には紫電改という戦闘機があった。戦闘機隊が 3 飛行隊あった。偵察隊が 1 個あった。偵察機は「彩雲」という名前だった。当時世界最速の飛行機だった。

私の同期では 17 歳で特攻により亡くなった者もいる。同期の島尾は体操がとても上手かった。1 番驚いたのは、予科練で水泳大会があり、練習したところを見たこともない高飛び込みに出場し、きれいな背面飛びで優勝した。島尾は 17 歳で特攻により亡くなった。島尾が特攻に行く時に、「今度は、俺が転勤しそうな気がする。お互いに長生きしよう。死ぬなよ。」と言って手を握り別れた。その島尾は別れてから 50 日の命だった。昭和 20 年 3 月 21 日に鹿屋基地から出撃した特攻隊で島尾は亡くなった。今では 17 歳の有名な体操選手がいるが、平和であるからオリンピックに出場することができる。戦争になると、みんな兵隊になる。

昭和20年5月22日に鹿屋基地へ転勤となった。当時の鹿屋基地は、特攻機の最前線だった。転勤の翌日にアメリカの空襲にあった。私たちが乗る偵察機3機が焼かれてしまった。1週間ほど新しい飛行機が届くまでは作戦中止となった。新しい飛行機が届いて、沖縄偵察の作戦を防空壕で聞いていた時、また空襲を受けた。私はいつでも出ることができるよう入口付近に腰かけていた。そんな中、グラマンの落とした弾が防空壕の入り口付近に落とされた。私は吹き飛ばされたが、ライフジャケットを着ていたので、ケガはなかった。心配した機長が私の名前を呼んだので、答えたが、なかなかわかってくれなかった。機長はじめ防空壕の中にいた全員が、爆風で鼓膜が破れてしまった。無傷は私だけだった。私たちは作戦中止となったので、特攻に行く戦友を何度も見た。人間爆弾もあり、爆弾に人間が乗っていた。約2トン爆弾は離陸するのも一苦労だった。ゼロ戦の音は泣き声のようだった。中には、250キロ爆弾を2発積んだ練習機の特攻もあった。練習機はベニヤ板と桜の木でできていた。同期が飛び立つ前に、手を握って「頑張れよ。」と声をかけると、「先にいって待っているぜ。」と言われた。今でもその光景を忘れることができない。座席にはマグロのような爆弾を乗せていた。特攻隊でなくて本当によかったと、心の底から思った。沖縄戦だけでも120人以上が特攻で亡くなっている。目の前で人が死ぬということを目の当たりにしないので、作戦が出ると「明日が俺の命日か」と思うだけで、ショックを受けたり、悲しんだりしなかった。

昭和20年3月18日に高知沖で敵の戦闘機を偵察隊が発見した。3月19日大空中戦が松山上空でおこった。高知沖に偵察機3機を送り出した。私が隊舎で朝食をとろうとした時に、グラマンによる機銃掃射を受けた。逃げようと思ったが、みんなが大きい靴を履いて逃げたので、私に合う靴がなかった。敵より隊舎へ目がけて機銃掃射を受け、私の体の周りに機銃が抜けていった。後で見に行くと私が通った周りには、無数の弾の跡があった。とにかく防空壕へ逃げた。防空壕の中から飛行場の近くで紫電改とグラマンの空中戦を見た。中島や伊予市の上空だった。実際の空中戦を見たのは初めてだった。偵察機の1機が高知沖で敵の戦闘機を見つけ、連絡してきたので、松山から紫電改が向かった。偵察機1機が四国山脈の上でグラマンに体当たりをして戦死した。今でもその近くに慰霊碑が建っている。

今の飛行場の付近は本当に戦場だった。戦後70年、平和な日本を守っているのは、今聞いてくれている君たちだ。病気にならないように、できたら元気に走り回れるような趣味を見つけ、人と関わり合いながら過ごしてほしい。

質疑応答（約10分）

Q：空母はあったのか？

A：19年の中ごろ、マリアナ海戦ではなくなっていた。大和が出ていくのは見た。大きかった。大和が沈む前に基地の横を通って行った。

Q：防空壕の中はどうなっている？

A：普通の爆弾が落ちたくらいでは壊れないくらい、奥まで深く掘ってある。封鎖はしているが、松山で私たちが入ったところもあった。

Q：2トンの爆弾の大きさは？

A：大きなマグロを想像してみてください。それくらい大きかった。

Q：食べ物は何を食べていた？

A：航空弁当は巻き寿司6個いなり寿司2個が定番で贅沢をさせてもらっていた。麦ごはんは食べず白米と豚汁だった。ごちそうだった。戦争が終わり家に帰り、こんなものしか食べられないのか、と母に言うと、ひどく怒られた。

Q：掩体壕の中はどうなっている？

A：空洞になっている。松山市にも3つ残っている。

Q：戦闘機は最大何人乗れる？

A：紫電改は1人乗り。空中戦の時は2機の編隊だった。

Q：受信機、送信機のスペースはどれくらい？

A：一人で座って乗って操作できるくらいだった。

Q：今まで何機くらいの飛行機に乗った？

A：彩雲、飛行艇US2、PBY等に載ったことがある。両脇にロケットの噴射をつけていた。

Q：掩体壕の大きさは？

A：飛行機がまるごと入るので、縦5メートル横10メートル位の大きさ。

Q：電報の送る速度は？

A：瞬時に届く。対話ができる位だった。昭和20年の6月25日頃、生電が飛んだ。みんな死にたくなかったため、両親や家族に悲しみの電報がいきかった。

- ・ 平和の大切さと戦争の恐ろしさを改めて知ることができた。
- ・ 教科書や資料に載っていないことも学習できた。